

厚生科学研究費補助金（新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業）
「我が国における動物由来感染症の感染実態把握に資する研究」
分担研究報告書

国内の患者症例報告に基づく動物由来感染症の実態把握に関する研究

研究分担者 高山直秀 東京都立駒込病院小児科

研究要旨：国内で発表された症例報告から日本における動物由来感染症の実態を知る目的で文献データベースを利用して、2004 年末から 2007 年末の間に公表された動物由来感染症の症例報告を検索した。39 疾患をキーワードとして検索し、598 件の文献を抽出した。このうち総論，治療法，検査法などに関する文献，国内の英文誌に掲載された外国で発生した外国人の症例報告，外国で感染した日本人輸入例の症例報告を除外した結果 284 件が抽出された。上記期間に 1 件以上の症例報告が掲載された疾患は 21 疾患であり，疾患別ではクリプトコッカス症が 58 件で最も多く，バルトネラ症が 38 件，つつが虫病が 26 件，パスツレラ症が 22 件であった。また，症例数では，クリプトコッカス症が 68 例で全体の 19.4 %を占めた。猫ひっかき病（バルトネラ菌症）が 47 例で，つつが虫病が 31 例，パスツレラ症が 24 例，トキシカラ症とエキノコックス症が 20 例，エルシニア症が 18 例であった。文献検索により抽出した症例報告から動物由来感染症の発生動向を知るという手法には，発生した症例の一部しか把握できないという欠陥はあるが，通常の発生動向調査では得られない感染経路，診断法などに関する情報も入手することが可能であるため，動物由来感染症の実態を明らかにするために有用な方法であると言える。

A. 研究目的

わが国において動物由来感染症は長く注目されることがなかったが，伝染病予防法に代わり，1999 年に「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（感染症法）が施行されたことに伴い，一部の動物由来感染症が発生動向調査の対象疾患に指定された。このことにより，医療及び獣医療関係者の間に動物由来感染症の重要性が認識されるようになった。感染症法により動物由来感染症の届出制度は整備されたとはいえ，届出はあくまでも医師が動物由来感染症を正しく診断できることが前提となっている。卒前及び卒後教育に

おいて動物由来感染症について学ぶ機会をほとんどもたなかった診療現場の医師にとって動物由来感染症の症例を正しく診断することにはかなりの困難がある。さらに動物由来感染症の診断に必要な微生物学的，血清学的，遺伝子的検査が実施できる機関が限定され，検査可能研究施設に関する情報も限られていることが問題を一層困難にしている。こうした事態を打開するために，「国内の患者症例報告に基づく動物由来感染症の実態把握及び今後の患者症例報告収集と検索システムの開発に関する研究国内の患者症例報告に基づく動物由来感染症の実態把握及び今後の患者症例報告収集と検

索システムの開発に関する研究」班では、(1)過去に公表された人獣共通感染症関連の症例報告を可能なかぎり収集し、(2)収集した症例を疾患ごとに医療者側の見地から整理して、症例集を作成し、(3)作成した症例集に記載された実際の症例に基づき個々の疾患の実態を記述し、(4)症例集および個々の疾患の記述を CD-ROM にまとめて臨床現場に配布した。本研究班ではさらに動物由来感染症症例の把握数を増すために、2004 年末から 2007 年末までに公表された動物由来感染症症例を検索し、症例の分析を行い、その結果を臨床現場に還元することを目指した。

B. 研究方法

動物由来感染症症例報告の収集は、全研究班で実施した文献検索に引き続き、2004 年末から 2007 年末までの症例報告文献をデータベースを利用して収集した。

データベースとしては、独立行政法人科学技術振興機構（旧日本科学技術情報センター）所蔵のものをを用い、下記の 39 の疾患名（日本語及び英語）をキーワードとして検索した。

検索対象感染症として、B ウイルス感染症、リンパ球性脈絡髄膜炎、狂犬病、狂犬病関連リッサウイルス感染症、日本脳炎、サル痘、E 型肝炎、腎症候性出血熱、Q 熱、オウム病、ブルセラ症、ライム病、鼠咬症、リステリア症、炭疽、ペスト、つつが虫病、パストツレラ症、類丹毒、仮性結核、発疹チフス、野兎病、猫ひっかき病（バルトネラ菌症）、エルシニア症、秋やみ、発疹熱、紅斑熱、回帰熱、クリプトコッカス症、真菌症（糸状菌症）、クリプトスポリジウム症、ジアルジア症、トリパノソーマ症、トキソプラズマ症、エキノコックス症、糞線虫症、トキソカラ症、アライグマ回虫症、肝蛭を選択した。

倫理面への配慮

本研究で用いた文献には個人情報が含まれていないため、倫理面での問題はないと考える。

C. 研究結果

1. 一次調査

上記の疾患をキーワードとして検索した結果、合計 598 件の文献が検出された。

2. 二次調査

一次調査で検出した文献の抄録を検討して、総論、治療法、検査法など症例報告以外の文献を削除した。また、日本の学会誌に掲載された外国人の症例報告は除外し、日本人症例であっても外国で感染したと考えられる、いわゆる輸入例も集計対象外とした。その結果、該当文献数は 328 件となった。

3. 三次調査

二次調査で国内発生動物由来感染症症例と判断された報告のコピーを入手して、さらに検討した。抄録では判断できなかった輸入例、別の雑誌に発表されているものの同一の症例などを除外した。また、2 次集計では、秋やみをレプトスピラ症として、仮性結核をエルシニア症として集計した。その結果、上記期間内に 1 例以上の症例が報告された疾患は 21 疾患、文献数は合計 284 件となった。

文献件数の多少を感染症ごとにみると、クリプトコッカス症が 58 件で全体の 20 % を占めた。次いで、猫ひっかき病（バルトネラ菌症）が 38 件、つつが虫病が 26 件、パストツレラ症が 22 件、E 型肝炎が 21 件、トキソカラ症とエルシニア症が各 15 件、エキノコックス症が 13 件、糞線虫症が 11 件と続いた（表 1）。前回の調査時にはクリプトコッカス症症例報告文献は 29 件検索され、免疫抑制状態にあると推定された

症例報告を除いて 22 件となった。今回の調査では、基礎疾患のないクリプトコッカス症症例報告文献は 24 件であり、残る 34 件の報告症例には基礎疾患があり、原疾患のため、または治療のため免疫抑制状態にあると推定された症例であった。これらの症例も今回は除外せず、分析に含めることとした。

文献から、報告されている症例数を調査したところ、21 種の感染症全体で報告症例数は 345 例であった（表 1）。疾患別では、クリプトコッカス症が 68 例で全体の 19.4 % を占めた。猫ひっかき病（バルトネラ菌症）が 47 例で、つつが虫病が 31 例、パスツレラ症が 24 例、トキシカラ症とエキノコックス症が 20 例、エルシニア症が 18 例と続いた（表 1）。

4. 疾患ごとの調査結果

4-1. クリプトコッカス症

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内にクリプトコッカス症の文献は 58 件検索され、68 症例が記載されていた。年別では、2004 年に 24 文献、28 症例、2005 年に 16 文献、19 症例、2006 年には 8 文献、10 症例、2007 年に 10 文献、11 症例の報告がなされていた（表 2）。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布は、10 歳代から 80 歳代まで分散していたが、60 歳代が 20 例と最も多く、70 歳代が 14 例でこれに次いだ（表 3）。

ロ) 基礎疾患の有無

症例の中には基礎疾患を有するものが多く、何らかの基礎疾患がある症例が 41 例、基礎疾患のない症例が 27 例であった（表 4）。肺クリプトコッカス症 38 症例では、基礎疾患がない症例が 20 例、基礎疾患を有する例が 18 例と、基礎疾患のない症例が半数以上であったが、皮膚クリプトコッ

カス症 10 症例では基礎疾患がない症例は 2 例で、基礎疾患がある症例が 8 例、髄膜炎及び髄膜脳炎症例 13 例中基礎疾患のない症例は 4 例であった。肺クリプトコッカスと皮膚クリプトコッカス症を合併した症例、及びクリプトコッカス性蜂窩織炎と全身性クリプトコッカス症を合併した症例が各 1 例あったため、症例の延べ数は 70 症例となっている。

エ) 主訴及び診断に要した主な検査

受診者の中には、自覚症状がなく、検診や他の疾患の経過観察中に発見された肺の異常陰影の精査を目的に受診した例が 22 例あり、中でも検診で異常を指摘された例が 15 例と多かった。訴えられた症状としては、発熱が 11 例、皮膚の腫瘍などの症状が 15 例と多かったが、嘔吐、咳嗽などから意識障害、複視、難聴までさまざまな訴えがみられた（表 6）。

診断に要した検査では、肺クリプトコッカス症 37 例中、15 例で肺生検、14 例で気管支鏡検査が行われ、クリプトコッカス抗原が 8 例で検査されていた。また抗原検査は診断目的だけでなく、経過観察目的でも実施されていた。髄膜炎または髄膜脳炎の 13 例中、病理組織検査で診断された 1 例を除き、12 例で髄液検査が実施されていた。皮膚クリプトコッカス症 10 例中 9 例で、皮膚生検ないし病変部の病理組織検査が行われ、うち 7 例では生検検体ないし組織片が培養検査に供されていた。膿培養の実施は 2 例と少なかった（表 6）。

カ) 病原体

起因菌は全症例で *Cryptococcus neoformans* と同定されていた。

キ) 治療、予後

必要に応じて、肺区域切除術やデブリドマンなどが行われていた。投薬内容の記載がなかった例が 6 例、投薬せずに経過をみた 1 症例を除いて、抗真菌薬が投与されて

いた。薬剤としては、フルコナゾールが最も多く投与され、イトラコナゾールがこれに次いだ。2剤を併用した症例もみられた(表6)。

多くの例は、改善ないし治癒していたが、治療にも係わらず症状の改善がなかった例が1例、予後の記載のない例が2例、死亡例が8例報告されていた。死亡例8例のうち肺クリプトコッカス症、髄膜(脳)炎が各2例、皮膚クリプトコッカス症とクリプトコッカス性アジソン病が各1例であった。別の死亡例2例はいずれも皮膚クリプトコッカス症症例であり、皮膚病変は改善したものの、1例は肺癌で、他の1例は肺炎での死亡が報告された(表5)。

キ) 感染機会

感染機会に関する記載がある報告は少なかつたが、自宅の庭、隣家に鳩が群れていたとの例が7症例あり、うち4例は肺クリプトコッカス症症例であった。他にイヌ、インコ、ニワトリ飼育者が各1例ずついた(表5)。

ク) 発生上の特徴

地域別の症例数では、東京都が10例、大阪府が7例、愛知県、福岡県が各5例と多かつたが、発生地は北海道と沖縄県を除く地域に分布しており、特定の地域に集積する傾向は見られなかつた。

4-2. 猫ひっかき病(バルトネラ症)

ア) 年別文献数及び報告症例数

2004～2007年までに38件の文献が検索され、合計47例の症例が記載されていた。年別に公表された文献数をみると、2004年が12件、2005年が10件、2006年が7件、2007年が9件であった。報告された症例数は、2004年から2007年まで、それぞれ17例、12例、7例、11例であった(表7)。

イ) 患者の男女別年齢分布

報告された症例の年齢分布をみると、幼

児から中高年者まで幅広く分布していたが、14歳以下と50歳代に患者が比較的多く、15歳未満の小児患者は約45%(21/47)であった。最年少の患者は1歳児で、最高齢者は67歳であった。男女比は21:26で、女性患者が男性患者よりやや多かつた(表8)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

患者の主訴では、皮下腫瘍や腫脹、発熱、視力障害がそれぞれ27例、12例、8例と多かつたが、痙攣と意識障害を来した例が1例みられた。初診時の主要症状では、皮下腫瘍・腫脹、リンパ節腫脹、発熱、視力障害がそれぞれ24例、8例、8例であった。症状として、発熱のみの患者が1例、視力障害のみの患者が2例あつた(表9)。

エ) 診断に要した主な検査

実施された検査法の中では、抗体検査が28例、CTやMRI検査が26件あり、生検ないし切除が12件、眼底検査が9件、超音波検査が4件などであつた(表10)。

オ) 病原体

病原体に関する記載があつた44例のうち、9例では病原体が確定できなかつたが、残る35例では*Bartonella henselae*であつた。

カ) 治療及び予後

治療では、抗菌薬投与のみにて治療した例が32例、抗菌薬にステロイド剤を併用した例が5例、ステロイドのみ投与した例が1例、外科的処置によつた例が16例みられた(表10)。

キ) 動物飼育歴ないし接触歴

動物飼育歴や接触歴に関する記載があつた38例のうち、ネコの飼育歴があつた例が25例、ネコとの接触歴があつた例が6例、イヌ飼育歴または接触歴があつた例が8例であつた(イヌとネコの飼育歴2例あり)。一方、ネコとの接触歴を否定した患者は2例であつた(表10)。

ク) 発生上の特徴

地方別に発生例数をみると、関東地方が 16 例、近畿地方が 7 例、九州地方が 6 例、中国地方が 2 例、四国、東北、北陸地方が各 1 例であり、北海道からの報告はなかった（表 9）。

4-3. つつが虫病

ア) 年別文献数及び報告症例数

2004～2007 年までに 26 件の文献が検索され、合計 31 例の症例が記載されていた。年別に公表された文献数をみると、2004 年が 4 件、2005 年が 6 件、2006 年が 9 件、2007 年が 7 件であった。報告された症例数は、2004 から 2007 年まで、それぞれ 4 例、9 例、9 例、9 例であった（表 11）。

イ) 患者の男女別年齢分布

報告された症例の年齢分布をみると、幼児から中高年者まで幅広く分布していたが、50 歳未満には症例が少なく、60 歳～70 歳代に患者が比較的多くみられた。最年少の患者は 9 歳児で、最高齢者は 81 歳であった。男女比は 18：13 で、男性患者が女性患者よりやや多かった（表 12）。

ウ) 主訴及び初診時の所見

患者の主訴では、発熱、皮疹・紅斑がそれぞれ 25 例、19 例と多かったが、倦怠感、頭痛、咽頭痛を訴えた例もそれぞれ、7 例、5 例、4 例みられた。初診時の主要症状では、皮疹・紅斑が 21 例で最も多く、痂皮、発熱がそれぞれ 15 例、11 例と続いた。項部硬直、意識障害を認めた例が各 1 例あった（表 13）。

また、ダニの刺痕が認められた例は 29 例あり、部位は上肢が 6 例、下肢が 8 例、腋窩が 3 例、体幹部が 7 例、腰臀部が 2 例、陰部が 2 例、頸部が 1 例であった。

エ) 診断に要した主な検査

実施された検査法の中では、抗体検査が全 31 例で実施されていたが、IgM、IgG 抗体と記された症例が 19 例、間接蛍光抗体

法が 5 例、ペルオキシダーゼ法が 3 例であった。PCR 法を実施した症例が 5 例、Weil-Felix 反応を行った症例が 4 例みられた（表 14）。

カ) 病原体

病原体に関する記載があった 30 例はすべて *Orientalis tsutsugamushi* であった。残る 1 例では病原体が確認できなかった。

キ) 治療及び予後

治療では、抗菌薬投与のみにて治療した例が 25 例、DIC や敗血症性ショックを併発して、蛋白分解酵素阻害剤やステロイド剤を併用した例が 5 例、胆嚢摘出術を受けた例が 1 例みられた（表 14）。

ク) 感染機会

感染機会としては、山菜とりなどのために山林に入ったことが 9 例、農業関連が 7 例、自宅が山林のそばが 3 例、イヌの散歩などのために草むらに入った者が 3 例あった（表 14）。

ク) 発生上の特徴

地方別に発生例数をみると、九州地方が 7 例、東北地方が 6 例、中国四国地方が 4 例、関東甲信越地方が 8 例、中部、北陸地方が各 2 例、近畿地方 1 例であり、北海道からの報告はなかった（表 13）。

4-4. パスツレラ症

ア) 年別文献数及び報告症例数

パスツレラ症患者の症例報告文献数は 4 年間で 22 件、報告症例数は 24 例検索できた。報告年は 2004 年に 6 件、7 症例、2005 年に 4 文献、4 症例、2006 年には 3 文献、4 症例、2007 年には 9 文献、9 症例の報告があった（表 15）。

イ) 患者の男女別年齢分布

報告された患者の年齢分布では 50 歳代が 8 例で最も多かったが、10 歳代から 80 歳代まで広い年齢層に発生がみられた。患者の男女比は 7：17 で、女性が男性の約 2.4

倍多かった（表 16）。

り) 主訴及び初診時の所見

主訴では、受傷部位の発赤・腫脹が最も多く 24 例中 14 例が訴えた。次いで疼痛が 10 例、発熱が 9 例であった。意識障害が 3 例みられた。初診時の主要所見では、受傷部位の発赤・腫脹が 15 例で最多で、受傷部位からの排膿が 7 例でみられた（表 17）。また、意識障害を認めた例が 4 例あった。

え) 診断に要した主な検査

パスツレラ症の診断には原因菌の分離同定が不可欠であるため、全例で培養検査が実施されていたが、材料としては、膿が 15 例で最も多く、血液が 4 例、喀痰、生検検体が各 3 例あった（表 17）。24 例中 23 例からは *Pasteurella multocida* が分離され、1 例からは *Pasteurella haemolytica* が分離された。

わ) 治療及び予後

病型としては、蜂窩織炎が 13 例で最も多かったが、敗血症が 4 例、肺炎が 3 例の他、髄膜炎を発症した例も 1 例あった（表 18）。

多くは抗菌剤の投与により改善したが、DIC を合併した症例では蛋白分解酵素阻害剤も投与された。慢性閉塞性肺疾患で在宅酸素療法中の患者は肺炎を発症して人口換気が必要となった。24 例中 22 例は後遺症なく回復したが、1 例は感染が動脈瘤に及んで動脈瘤破裂を来し、腱鞘炎を起こした 1 例では軽度の関節拘縮を残した。

か) 感染機会

感染機会としては、咬傷が 12 例、ひっかき傷が 4 例あり、ペットとの濃厚接触が 5 例あった。感染源となった動物種としては、ネコが 15 例と最も多く、次いでイヌが 7 例であった（表 18）。

感染源と考えられたイヌ、ネコの検査を行い、*Pasteurella multocida* が分離された報告が 3 件あった。

き) 発生上の特徴

報告された症例 24 例中 6 例が愛知県で、大阪府と高知県で各 3 例、北海道で 2 例発生していたが、1 例発生した地域が全国に分布しており、特定地方への集積傾向は見られなかった（表 18）。

4-5. E型肝炎

7) 年別文献数及び報告症例数

E 型肝炎患者の症例報告文献数は 4 年間で 21 件、報告症例数は 23 例検索できた。報告年は 2004 年に 4 件、4 症例、2005 年に 6 文献、6 症例、2006 年には 6 文献、8 症例、2007 年には 5 文献、5 症例の報告があった。特に、（表 19）。

い) 患者の男女別年齢分布

報告された患者の年齢分布では 50 歳代以上が 16 例で全体の約 70 % を占め、若年者に患者が少なく、中高年者の患者が多く診られた。患者の男女比は 20 : 3 で、男性が女性の約 7 倍多かった（表 20）。

り) 主訴及び初診時の所見

主訴では倦怠感が最も多く 23 例中 12 例が訴えた。次いで発熱が 9 例、黄疸が 5 例であった。初診時の主要所見では黄疸と全身倦怠感が 11 例で最多であった（表 21）。

え) 診断に要した主な検査

E 型肝炎の診断には IgM 抗体測定とウイルス遺伝子の証明がそれぞれ 21 例、22 例で用いられていた（表 22）。

わ) 治療及び予後

劇症肝炎の経過をとった例が 3 例、重症化した例が 1 例報告されていた。23 例中 20 例が回復ないし改善したが、死亡例が 3 例あった（表 22）。ウイルスの遺伝子型では Genotype III が 8 例、Genotype IV が 12 例であった（表 23）。

か) 感染機会

E 型肝炎の推定感染機会としては、獣肉摂食歴のあった患者が 13 例あり、輸血歴

のあった例が1例みられた。残る9例の感染機会は不明であった(表21)。

キ) 発生上の特徴

報告された症例23例中4例が愛知県で、東京都と北海道で各3例、宮城県で2例発生していたが、1例発生した地域が全国に分布しており、症例の集積傾向は見られなかった(表24)。

4-6. トキソカラ症

ア) 年別文献数及び報告症例数

2004～2007年に15件の文献が検索され、合計20例の症例が記されていた。年別では、2004年に7文献、7症例、2005年に2文献、2症例、2006年には5文献、11症例、2007年に1文献、1症例の報告があった(表25)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、50歳代の者が6例で最も多かったが、患者年齢は4歳以下から70歳代まで広く分布していた。患者の男女比は14:6で男性に多かった(表26)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は視力低下、霧視、飛蚊症、視野異常などの眼症状のほかに、発熱、下痢などの症状もみられた(表27)。主要症状でも、主訴と同様に眼底異常所見、硝子体異常、網膜剥離、ぶどう膜炎などの眼症状が多く、他に四肢麻痺、温痛覚異常、関節痛などが少数例みられた(表27)。

エ) 診断に要した主な検査

主な検査法としては、血中トキソカラ関連抗体の測定が実施されていたが、ELISA抗体と記された報告が13例、トキソカラ抗体との記載が5例に見られた。他に腹部CT検査が3例、胸部CT検査が1例、腹部超音波検査、脊髄MRI検査が各1例で記載されていた(表28)。

病原体として、*Toxocara canis*が11例で、

*Toxocara*のみが8例で記載されており、1例では病原体が特定されていなかった。

カ) 治療及び予後

投薬された抗寄生虫剤としては、アベンダゾールが5例、ジエチルカルバマジン、チアベンダゾールが各1例で使用され、ステロイド剤として、プレドニゾロンが8例、トリアムシノロンが3例で投与されていた。眼科的処置として、硝子体手術が5例、光凝固が1例で報告されていた(表28)。全例が回復ないし改善しており、死亡例の報告はなかった。

キ) 感染経路及び感染機会

感染源ないし感染機会に関しては、牛レバ刺しが4例、牛生食が2例、イヌが6例、ネコが3例報告されていた。(表28)。

ク) 発生上の特徴

患者の報告地は岐阜県が7例と最も多く、大阪府が3例、東京都が2例であったが、愛知県、大分県、福岡県、長崎県、愛媛県、青森県、千葉県、神奈川県が各1例で、特定の地域に集積する傾向はなかった(表27)。

4-7. エルシニア症

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に15件の報告文献が検索され、18症例が記載されていた。2004年に4文献、4症例、2005年に6文献、6症例、2006年には報告がなく、2007年には5文献、8症例の報告がなされていた(表29)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、10歳未満の患者が6名と多く、60歳代が4例、10歳代と50歳代の患者が3例、40歳代と70歳代が各1例であった。症例の男女比は、7:11で女性が若干多かった(表30)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は発熱が11例で最多であり、続いて腹痛が8例、下痢が7例、嘔吐が4例と

消化器症状が多かったが、皮疹も3例で訴えられていた。初診時の症状では、発熱が5例、下痢が4例、右下腹部痛が3例、腹部圧痛が2例、右下腹腫瘍、腹部膨満、腸重積、腸触知が各1例みられた他、皮疹3例、咽頭発赤2例、莓舌1例が報告されていた。また、ショック、腎不全、興奮不穏、心窩部痛、胸部浸潤影が各1例あった(表31)。

エ) 診断に要した主な検査

病原体検査としては、便培養の8例を始め、生検検体培養、咽頭培養、血液培養などが行われていた。また、溶血性レンサ球菌抗原検査が2例、エルシニア抗体検査、PCR検査が各1例でなされていた。他に、腹部CTが5例、大腸内視鏡検査が4例、注腸造影が3例、胃内視鏡検査と開腹手術が各1例で行われていた(表31)。

カ) 病原体

原因菌が *Yersinia pseudotuberculosis* と同定された例が5例、*Yersinia enterocolitica* と同定された例が10例、培養陰性が1例、菌分離を実施しなかった例が2例あった(表32)。

キ) 治療、予後

抗菌剤の投与のみで改善した症例が11例あり、抗菌剤にγグロブリン製剤を併用した症例が1例、開腹手術を受けた症例が2例、腎不全を来して血液濾過を受けた症例が1例あった。*Yersinia enterocolitica* の感染を受けた1例の死亡が報告された(表32)。

ク) 感染機会

湧き水や井戸水を飲用していた者が5例、ブタもつを食した者が2例、サラダが1例あり、不明との記載が2例、輸血との記載が1例、記載のない症例が8例あった。

ケ) 発生上の特徴

患者発生地は山形県、神奈川県が各3例、大阪府、岡山県、長崎県が各2例、ほか6県から各1例の発生がみられた(表32)。

4-8. エキノコックス症

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に13件の報告文献が検索され、20症例が記載されていた。2004年に6文献、13症例、2005年に2文献、2症例、2006年に3文献、3症例、2007年には2文献、2症例の報告がなされていた(表33)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、70歳代が7例と最も多く、40歳代が5例、60歳代が4例、50歳代が2例、10歳代と30歳代の患者が各1例であった。症例の男女比は、6:14で女性が男性の2倍以上であった(表34)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴としては、腫瘍の精査が7例で最も多く、背部の鈍痛が2例あった。発熱、黄疸、肝機能障害、胆汁嘔吐、右側腹部痛、右季肋部痛、下肢の浮腫、全身の掻痒感、易疲労感などが1例ずつ記載されていた。主要症状としては、肝腫大が5例で最も多かったが、特別の異常所見を認めない症例が12例あった(表35)。

エ) 診断に要した主な検査

20例中18例は抗体検査によって診断されていた。検査法はELISA法が10例、Wester Blot法が8例であった。残る2例は生検により診断されていた(表35)。

カ) 病原体

病原体は全例が多包条虫であった。

キ) 治療、予後

記載があった15例は全て外科的処置を受けており、腫瘍を完全に摘出できなかった症例では、術後にアルベンダゾールの投与を受けていた。死亡例の報告はなかった。

ク) 感染機会

酪農業を営む者が3例、漁業が1例、左官業、清掃員が各1例、井戸水、湧き水の飲用が3例、シカ生肉食が1例であった(表35)。

ク) 発生上の特徴

エキノコックス症流行地の北海道での発生が17例であったが、非流行地の東京都、青森県、群馬県での発生報告が各1件あり、青森県の症例は5歳まで北海道在住、東京都の症例は度々北海道に出張していたが、群馬県の症例は北海道への旅行歴も居住歴もなかった(表35)。

4-9. 糞線虫症

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に糞線虫症の文献は11件検索され、11症例が記載されていた。年別では、2004年と2005年にそれぞれ3文献、3症例、2006年には4文献、4症例、2007年に、1文献、1症例の報告がなされていた(表36)。他に2006年にはブラジルで感染したと考えられる例が1例あったが、輸入症例のため、集計からは除外した。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布は、40歳代から80歳代まで発生がみられたが、50歳代が7例と最も多かった(表37)。男女比は7:4であった。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では、嘔吐が3例、下痢と食欲不振が各2例、吐血、下血、腹痛が各1例など消化器関連のものが多く、他に呼吸困難が2例、血痰が1例、意識障害が1例などがあった(表38)。

初診時の症状では、呼吸不全が3例、眼結膜貧血、るいそう、麻痺性イレウスが各2例みられた。

エ) 診断に要した主な検査

上部消化管内視鏡検査が7例、腹部や胸部のCT検査が計3例、BAL、肺生検が各1例、髄膜炎を合併した例では、髄液培養、血液培養が行われており、抗利尿ホルモン不適合症候群(SIADH)を合併した例ではTSH、F-T3、F-T4、ACTH、アルドステロ

ン、コルチゾールなどのホルモン検査がなされていた。1例では抗糞線虫ELISA抗体が検査されていた(表38)。

カ) 病原体

全例で糞線虫が確認された。

キ) 治療、予後

イベルメクチンが6例で、チオベンダゾールが5例で投与されていたが、3例ではチオベンダゾールからイベルメクチンに変更されていた。肺炎症例の中にはステロイドパルス療法を受けた例があり、DICを合併した例は蛋白分解酵素阻害剤投与を受けていた。十二指腸潰瘍出血のため手術を受けた症例、十二指腸からの出血をマイクロカテーテルによる動脈塞栓術にて止血した症例が各1例あった。

7例は軽快したが、基礎疾患として胃癌を有し、DICを合併した症例、白血病治療中の症例、糖尿病があり、ぶどう膜炎のためステロイド治療中の症例、計3例が死亡した。1例は化膿性髄膜炎を合併して、髄膜炎の後遺症が残った(表39)。

ク) 発生上の特徴

糞線虫症発症の要因として、11例中7例は、抗HTLV-1抗体陽性、ステロイド治療中、糖尿病が各3例、白血病、胃癌が各1例で考えられた(表39)。

また、沖縄県出身者が4例、奄美大島出身者が1例、他に沖縄県からの報告例が2例あり、大分県、福岡県の住民が各1例であった(表39)。

4-10. Q熱

ア) 年別文献数及び報告症例数

2004-2007年にQ熱関連の症例報告は9件検索され、17症例が記載されていた。2004年に3文献、6症例、2005年に3文献、7症例、2006年に1文献、1症例、2007年には2文献、3症例の報告があった(表40)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、70歳代が7例と最も多く、0-4歳と30歳代が3例、50歳代が2例、40歳代と80歳代の患者が各1例であった。症例の男女比は、9:8で男女ほぼ同数であった(表41)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

患者の主訴は、発熱が10例で最も多く、咳嗽が5例、呼吸困難と喀痰が3例などであった。初診時の主要症状は、発熱が10例で最も多く、咳嗽、肝機能異常が各4例、肺炎3例、呼吸困難、頭痛が各2例であった(表42)。

エ) 診断に要した主な検査

検査法としては、IgM、IgG抗体が11例で、単に抗体検査と記載された症例が2例、PCR検査が2例あった。他に肝生検が1例、胸部CT検査が7例、腹部CT検査が1例であった(表42)。

オ) 病原体

全症例で *Coxiella burnetii* が起炎菌として記載されていた。

カ) 治療、予後

記載がなかった3例を除き、全例で抗菌薬が投与されていた。ニューキノロン系抗菌薬が2例、ミノサイクリンが6例、クラリスロマイシンが4例、エリスロマイシン、アジスロマイシン、βラクタム系が各1例であった。

17例中16例は後遺症なく回復していたが、陈旧性肺結核による換気障害を有していた1例は、Q熱感染により呼吸不全が憎悪し、在宅酸素療法が必要となった。

キ) 感染機会

感染源について記載された症例では、ネコが5例で最も多く、イヌが3例、ウシが2例、野鳥が1例であった。1例ではイヌからもPCR検査で *Coxiella* の遺伝子が証明されていた。

ク) 発生上の特徴

発生地としては、宮城県が8例と多く、

北海道が4例、愛知県が2例、奈良県、福島県、岐阜県が各1例であった。報告数が少ないため、宮城県で真に発生が多いか否かは判断できない(表42)。

4-11. 日本紅斑熱

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に日本紅斑熱の文献は9件検索され、症例は12例記載されていた。年別では、2004年には報告がなく、2005年に文献、6症例、2006年に3文献、4症例、2007年に2文献、2症例の報告がなされていた(表43)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、50歳代が5例で最も多く、60歳代が3例、70歳代が2例、10歳代と80歳代の患者が各1例であった。症例の男女比は、5:7であった(表44)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴としては、発熱、発疹・紅斑がともに11例と多く、倦怠感が3例、関節痛が2例、嘔吐、下肢脱力、意識障害、筋肉痛が各1例であった。主要症状は、発疹・紅斑が11例、発熱が10例、全身倦怠感と血小板減少症が各3例、関節痛が2例、歩行障害、食欲不振、筋肉痛、意識障害が各1例であった(表45)。

エ) 診断に要した主な検査

診断に要した検査として、12例全例で抗体検査が実施され、他にCT検査が2例、超音波検査が1例で行われていた。

オ) 病原体

病原体として、*Rickettsia japonica* が6例で記載されていたが、残る6例では病原体の記載がなかった。

カ) 治療、予後

抗菌剤として12例中11例はミノサイクリンが投与され、有効であった。残る1例ではミノサイクリンが無効で、シプロフロキサシンが投与されていた。DICを合併し

た例では蛋白分解酵素阻害剤，ステロイド剤，ヘパリンが投与されていた。

11 例は後遺症なく回復したが，DIC を合併した 1 例は歩行障害を残した。死亡例の報告はなかった。

キ) 感染機会

キャンプ地，野山，草刈りと記載された例が合計 5 例あり，残る 7 例では記載がなかった（表 45）。

ク) 発生上の特徴

島根県から 3 例が報告され，徳島県，和歌山県，鹿児島県から各 2 例，長崎県，愛媛県，福井県から各 1 例が報告された。甲信越以北からの報告例はなかった（表 45）。

4-12. リステリア症

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内にリステリア症の文献は 9 件検索され，症例は 9 例記載されていた。年別では，2004 年に 4 文献，4 症例，2005 年に 1 文献，1 症例，2006 年と 2007 年には，それぞれ 2 文献，2 症例の報告がなされていた（表 46）。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では，70 歳代が 4 例で最も多く，0-4 歳が 3 例，30 歳代と 60 歳代の患者が各 1 例であった。症例の男女比は，7:2 と男性に多かった（表 47）

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴としては，発熱が 7 例で最も多く，下痢，痙攣，胸部不快感が各 2 例，胸痛，起座呼吸，意識障害，項部硬直，頭痛が各 1 例であった（表 48）。

初診時の主要症状は，発熱が 4 例，項部硬直と意識障害が各 2 例であり，呼吸不全，起座呼吸，多呼吸，咳嗽，痙攣重積，頰脈，浮腫，胸部大動脈瘤が各 1 例であった。

エ) 診断に要した主な検査

9 例全例で細菌培養が行われていた。内容的には，髄液培養が 4 件，血液培養が 3

件，咽頭培養と血栓培養，摘出した弁の培養が各 1 件であった。他に頭部 CT 検査が 3 件，胸部 CT 検査と心超音波検査が各 2 件，心カテーテル検査が 1 件実施されていた（表 48）。

オ) 病原体

全例で *Lysteria monocytogenes* が検出された。決定した診断名は，化膿性髄膜炎が 4 例，髄膜脳炎が 1 例，感染性心内膜炎が 2 例，菌血症とリステリア症が各 1 例であった（表 49）。

カ) 治療，予後

全症例で抗菌薬が投与されていたが，種類はペニシリン系，セファロsporin 系，ペネム系，アミノグリコシド系など様々で，多くの症例で複数の薬剤が使用されていた。また，1 例ではステロイドパルス療法が行われ，人工換気を要した症例が 2 例，心血管系の手術を要した例が 1 例あった。7 例は治癒したが，化膿性髄膜炎，髄膜脳炎と診断された 70 歳代の男性 2 例は死亡した（表 49）。

キ) 感染機会

感染源，感染経路は全例で不明であった。

ク) 発生上の特徴

東京都から 2 例の報告があったが，その他の症例は各地方に分散しており，発生上の特徴は認められなかった。

4-13. オウム病

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内にオウム病の文献は 8 件検索され，症例は 10 例が記載されていた。年別では，2004 年に 3 文献，4 症例，2005 年に 2 文献，2 症例，2006 年に 1 文献，1 症例，2007 年に，2 文献，3 症例の報告がなされていた（表 50）。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では，50 歳代が 5 例で最も多く，60 歳代が 2 例，20 歳代，40 歳

代，70歳代の患者が各1例であった。症例の男女比は，5：5で差がなかった（表51）

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴としては，発熱が6例，呼吸困難が5例と比較的多く，咳嗽が2例，食欲不振，意識障害，ショックが各1例であった。

初診時の主要症状では，発熱が7例，咳嗽が4例，呼吸困難と全身倦怠感が各3例，ショック，意識障害，チアノーゼ，頭痛，食欲不振が各1例であった（表52）。

エ) 診断に要した主な検査

胸部画像検査と抗体検査が全例で実施されていた。抗体検査は蛍光抗体法によるものが5件，補体結合反応による検査が5件であった（表53）。

オ) 病原体

蛍光抗体法により抗体検査を実施した5症例では，病原体を *Chlamyphila psittaci* と確定できた。

カ) 治療，予後

7例でミノサイクリンが投与され，マクロライド系抗菌薬が3例で使用されていた。

10例中8例は治癒したが，70歳代の1例が死亡した。また，1症例は転院したため最終的には転機が不明であった（表53）。

キ) 感染機会

飼育していたインコと考えられる症例が7例，ペットの鳥を運んだ運送業者が1例，鳥飼育歴なしが1例，記載なしが1例であった。なお，インコが感染源と考えられた7例中，4例ではインコが死亡し，2例ではインコは元気であった（表53）。

ク) 発生上の特徴

夫婦で同時期に発症した例が2件報告されていた。発生地では大阪府で3例，長野県で2例の報告があったが，特定の地域に集積する傾向はみられなかった（表52）。

4-14. レプトスピラ症

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に7件の報告文献が検索され，12症例が記載されていた。2004，2005，2006年は各2件，2007年には1件の文献があり，2004年と2006年に2例，2005年に7例，2007年に1例の症例が報告されていた（表54）。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では，10-14歳の患者が6例，15-19歳が1例，20歳代が1例，50歳代と70歳以上の症例が各2例あった。症例はすべて男性であり，男女比は12：0であった（表55）。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は発熱が11例で最多であり，続いて頭痛が6例，筋肉痛，下痢，下肢痛が各1例であった。初診時の症状では，発熱が11例，下痢・嘔吐が6例，筋肉痛，下肢痛，腎不全が各2例であった（表56）。

エ) 診断に要した主な検査

病原体検査としては，抗体検査が12例で最も多く，培養が9例，PCRが8例で行われていた（表57）。

オ) 病原体

原因菌が *Leptospira interrogans* と同定された例が11例，*Leptospira kirschneri* と同定された例が1例であった（表57）。

カ) 治療，予後

補液のみで改善した症例が1例あったが，残る症例は抗菌薬の投与を受けていた。12例とも回復し，死亡例はなかった。

キ) 感染機会

ネズミと接触した者が2例，沖縄県の河川で遊んだ例が7例，河川の浄水槽を清掃した例が1例あった。

ク) 発生上の特徴

患者発生地は沖縄県が9例，長崎県，新潟県，愛知県が各1例であった（表56）。

4-15. トキソプラズマ症

ア) 年別文献数及び報告症例数

2004～2007年に7件の文献が検索され、合計8例の症例が記されていた。年別では、2004年に2文献、2症例、2005年と2006年には1文献、1症例ずつ。2007年には3文献、4症例の報告があった(表58)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、14歳以下の症例はなく、10代後半と20代が2例ずつ、40代が1例、60歳以上が3例であった。男女比は1:3で女性に多かった(表59)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は霧視、飛蚊症、視野異常などの眼症状、浮腫性紅斑、腫瘍・腫脹など皮膚症状に分かれた(表14)。主要症状でも、主訴と同様に眼症状と皮膚症状がみられたが、歯痛や筋力低下も記載されていた(表60)。

エ) 診断に要した主な検査

主な検査法としては、血中IgG、IgM抗体の測定が8例、眼底検査が4例、CT検査が1例であった(表61)。

オ) 治療及び予後

8例中、投薬を受けなかった例が1例あったが、それ以外の7例は何らかの薬物治療を受けていた。投与された薬剤としては、アセチルスピラマイシンが6例(単独投与2例、併用4例)、ST合剤が1例であった(表14)。予後は改善が3例、変化なしと再燃が各2例、不明が1例であった(表61)。

カ) 感染経路及び感染機会

胎内感染を受けたと考えられる症例が1例、後天性感染と判断される例が7例あった。後天性感染者での推定感染機会としては、ネコ飼育が3例、フェレット飼育が1例であった。

キ) 発生上の特徴

患者の報告地は東京都が2例、兵庫県、岐阜県、石川県、埼玉県、神奈川県が各1

例で、特定の地域に集積する傾向はなかった(表60)。

4-16. ライム病

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内にライム病の文献は5件検索され、5症例が記載されていた。年別では、2004年と2005年にそれぞれ2文献、2006年には報告がなく、2007年に、1文献、1症例の報告がなされていた(表62)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、40歳代に3例、30歳代と60歳代にそれぞれ1例の患者発生があった。症例の男女比は、3:2であった(表63)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は、紅斑が3例、皮疹が2例、痒みが1例であり、初診時の主な症状は、紅斑が5例、腫脹、硬結、関節痛、咬刺痕が各1例であった。神経症状を呈した症例はなかった(表64)。

エ) 診断に要した主な検査

ELISA抗体が2例で、Western Blot検査が2例で実施され、他に培養、PCR検査が各1例で行われ、皮膚生検も3例でなされていた(表64)。

オ) 病原体

病原体が確定できた症例は3例で、*Borrelia garini*が2例、*Borrelia afzelii*が1例であった(表64)。

カ) 治療、予後

ミノサイクリンの投与を受けた症例が3例、ドキシサイクリン、テトラサイクリンが各1例で投与され、全例が治癒した。なお、抗菌剤投与後にJahrisch-Herxheimer反応を呈した症例が2例あった。

キ) 感染機会

感染源は、全例でマダニの咬刺であった。

ク) 発生上の特徴

5例中4例は北海道から、残る1例は岐

阜県から報告されていた（表 64）。

4-17. 日本脳炎, その他

a) 日本脳炎

日本脳炎の文献は 2007 年に 2 件, 2004 年に 1 例あり, 症例は各 1 例報告されていた。症例は, 30 歳代, 40 歳代, 50 歳代の男性であった。主訴は発熱, 頭痛, 不穏状態であり, 初診時の所見は, 項部硬直, Kernig 徴候, 意識障害などであった。40 歳代の男性は後遺症の経過報告であったため, 所見は失語と右上下肢の不全麻痺であった。検査としては, 血中抗体検査が全例でなされ, 1 例では髄液の PCR 検査が行われ, ウイルス分離も試みられていた。40 歳代と 50 歳代の症例は脳炎を発症して後遺症が残ったが, 30 歳代の症例は脳炎ではなく, 無菌性髄膜炎で, 後遺症なく回復した。脳炎の発生地域は島根県と石川県であった。

b) 肝蛭

2007 年に 2 文献, 2 症例, 2005 年に 1 文献, 1 症例の報告があり, 症例は 30 歳代男性, 60 歳代女性, 70 歳代男性であった。主訴は, 好酸球増多が 2 例, 上腹部痛と肝臓腫瘍の精査が 1 例であった。診断のための検査では, 全例で, 血中抗体検査と腹部 CT 検査がなされ, 2 例では MRI 検査が, 1 例では超音波検査が行われた。70 歳代の症例では肝悪性腫瘍との鑑別のために開腹手術がなされた。全例がプラジカンテル投与を受けたが, 60 歳代の症例ではプラジカンテル治療が無効で, 投薬を終了した後, 自然治癒した。また, 30 歳代の症例は同薬が無効のため, 未承認薬のトリクラベンダゾールにより治療して治癒した。ウシ飼育者が 2 例, 自生のセリを食していた例が 2 例あった。発生地は鳥取県が 2 例, 長崎県が 1 例であった。

c) ランブル鞭毛虫症

2007 年と 2005 年にそれぞれ 1 文献, 1 症例の報告があった。2005 年には輸入例 1 例の報告もあったが, 集計からは除外した。症例は, 2 例とも 30 歳代の男性で, 1 例は嘔吐, 下痢, 心窩部痛を, 他の 1 例は下痢, 腹痛を主訴として受診した。初診時の所見は, 1 例は理学的に異常なく, 他の 1 例は発熱, 水様下痢を認めた。前者では上部消化管検査がなされ, 後者では便培養と便塗抹検査が行われた。2 例ともメトロニダゾールの投与を受けて, 治癒した。2 症例とも海外渡航歴はなかった。1 例がステロイド治療中であった。

d) 野兎病

2005 年に 1 文献, 1 症例の報告があった。症例は, 60 歳代の男性で, 発熱と肘窩部と腋窩部の腫脹, 圧痛を主訴として受診した。初診時には, 肘窩部に膿瘍, 腋窩部に瘻孔と硬結を認めた。病変部の組織検査, 細菌培養, 血中抗体検査により, 診断された。腋窩リンパ節郭清術, ストレプトマイシン筋注, ミノサイクリン経口投与により治癒した。発生地は千葉県, 症例は傷のある手で野ウサギを処理していた。

e) 類丹毒

2007 年に 1 文献, 1 症例の報告があった。症例は 30 歳代の男性で, 疼痛を伴う手背の紅斑を主訴に受診した。初診時にも手背に有痛性の紅斑と腫脹を認めた。皮膚生検, 生検組織の培養を行い, *Erysipelothrix rhusiopathiae* を検出した。アンピシリン投与にて治癒した。症例は素手でブタ肉を処理中に誤って手に傷を負っていた。

D. 考察

今回は文献データベースを利用して 2004 年から 2007 年に報告された動物由来感染症症例を検索し, 284 件の文献と 343 例の症例を抽出できた。今年度ではこれらの文献のうち, つつがむし病, パスツレラ

症，トキソカラ症，エルシニア症，エキノコックス症，Q熱，日本紅斑熱，リステリア症，オウム病，ライム病，糞線虫症，クリプトコッカス症，日本脳炎，肝蛭，ジアルジア症，野兔病，類丹毒の症例報告について本文を検討し，重複して報告された症例を除外し，発生地域，感染経路，症例の年齢分布，診断法，予後などに関する情報を集計した。動物由来感染症のいくつかは感染症4類疾患に指定されて届出が義務づけられている。4類疾患に指定された動物由来感染症に関しては，その発生状況を文献調査よりも，現状に即して把握できるが，バルトネラ症やパスツレラ症など4類疾患に指定されていない動物由来感染症に関しては，発生件数の把握はごく一部になるものの，データベースを利用した文献検索の手法によって調査する以外に方法がないため，今後も文献検索による調査を継続する必要がある。

E. 結論

文献のデータベースを利用して動物由来感染症の発生動向を知るという手法には，欠陥はあるものの，通常の発生動向調査では得られない情報，つまり感染経路，診断法などに関する情報も入手することが可能であり，こうした情報を集積・分析することにより国内における動物由来感染症の実態を明らかにするとともに，さらには動物由来感染症の診断を容易にする手段を提供できる。

F. 健康危険情報

特記すべきものなし。

G. 研究発表

未発表

H. 知的財産権の出願・登録状況

予定なし。

表1. 三次調査で検出された疾患別文献数

疾患名	件数	例数	疾患名	件数	例数
クリプトコッカス症	58	68	リステリア症	9	9
バルトネラ症	38	47	オウム病	8	10
つつが虫病	26	31	レプトスピラ症	7	12
パスツレラ症	22	24	トキソプラズマ	7	8
E型肝炎	21	23	ライム病	5	5
トキソカラ症	15	20	日本脳炎	3	3
エルシニア症	15	18	肝蛭	3	3
エキノコックス症	13	20	ジアルジア	2	2
糞線虫症	11	11	野兔病	1	1
Q熱	10	17	類丹毒	1	1
日本紅斑熱	9	12	合計	284	345

表 2. クリプトコッカス症症例の年別論文数
及び症例数

年	論文数	症例数
2004	24	28
2005	16	19
2006	8	10
2007	10	11
合計	58	68

表 3. クリプトコッカス症の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	0	0	0
5-9y	0	0	0
10-19y	2	0	2
20-29y	2	2	4
30-39y	5	1	6
40-49y	7	2	9
50-59y	6	5	11
60-69y	10	10	20
70-79y	10	4	14
80y-	0	2	2
合計	42	26	68

表 4. クリプトコッカス症症例における基礎疾患の有無

診断名	健常者	基礎疾患	合計
肺クリプトコッカス症	20	18	38
皮膚クリプトコッカス症	2	8	10
髄膜炎	2	6	8
脳髄膜炎	2	3	5
蜂窩織炎	0	2	2
虫垂嚢胞粘液水腫	1	0	1
全身性クリプトコッカス症	0	1	1
脳膿瘍	0	1	1
壊死性筋膜炎	0	1	1
中枢性クリプトコッカス症	0	1	1
化膿性脊椎炎	0	1	1
アゾソン病	0	1	1
合計	27	43	70

肺+皮膚クリプトコッカス症 1例, 蜂窩織炎+全身クリプトコッカス症 1例

表 5. クリプトコッカス症例の動物との接触歴および予後

動物との接触	例数	予後	例数
近所に鳩	7	回復・改善	57
肺クリプトコッカス症	4	死亡	8
髄膜炎	2	不変	1
皮膚クリプトコッカス症	1	記載なし	2
イヌ飼育	1		
インコ飼育	1		
ニワトリ飼育	1		

表6. クリプトコッカス症の主訴, 投薬, 検査

主訴	例数
肺の異常陰影	22
検診で	15
経過観察中	4
他院で	1
不明	2
発熱	11
皮膚の硬結, 腫瘤	6
皮膚の発赤, 腫脹	4
皮膚の潰瘍	3
紅斑, 皮疹	2
頭痛	4
意識障害	4
咳嗽	4
呼吸困難	3
喀痰	3
嘔吐	3
全身倦怠感	3
筋力低下	3
食欲不振	2
背部痛	2
腰痛	2
記憶力低下	1
痙攣	1
やせ	1
不全麻痺	1
複視	1
難聴	1
胸痛	1
筋肉痛	1
歩行障害	1
尿失禁	1
妊娠糖尿病	1

投薬	例数
皮膚クリプトコッカス症	10
イトラコナゾール	3
フルコナゾール	6
アムホテリシン B+フルコナゾール	1
肺クリプトコッカス症	37
イトラコナゾール	9
フルコナゾール	20
イトラコナゾール+フルコナゾール	1
フルシトシン	1
投薬なし	1
記載なし	5
髄膜(脳)炎	13
フルコナゾール	6
アムホテリシン B	1
ボリコナゾール	1
ホスフルコナゾール	2
フルシトシン+フルコナゾール	1
アムホテリシン B+フルシトシン	1
記載なし	1

検査	例数
肺クリプトコッカス症	37
肺生検	15
気管支鏡	14
肺切除	3
抗原検査	8
喀痰培養	2
髄膜(脳)炎	13
髄液検査	12
抗原検査	1
病理組織	1
皮膚クリプトコッカス症	10
病理組織検査	9
生検, 組織片培養	7
膿培養	2

表 7. 猫ひっかき病の年度別論文
及び症例数

年	論文数	症例数
2004	12	17
2005	10	12
2006	7	7
2007	9	11
合計	38	47

表 8. 猫ひっかき病症例の年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	3	3	6
5-9y	1	4	5
10-14y	5	5	10
15-19y	1	2	3
20-29y	2	1	3
30-39y	2	1	3
40-49y	4	2	6
50-59y	3	5	8
60y-	0	3	3
合計	21	26	47

表 9. 猫ひっかき病症例の主訴，主要症状，発生地

主訴	例数
皮下腫瘍・	27
発熱	12
視力障害	8
発疹	3
疼痛・圧痛	3
リンパ節腫	3
腹痛	2
胸水貯留	2
眼痛	1
痙攣	1
意識障害	1
下痢	1
合計	64

主要症状	例数
皮下腫瘍・腫	24
発熱	8
視力障害	8
リンパ節腫脹	6
発疹	3
肝脾腫	2
痙攣発作	1
飛蚊症	1
全身倦怠感	1
皮膚膿疱	1
合計	55

主要症状	例数
発熱のみ	1
視力障害のみ	2

発生地	例数
関東	16
近畿	7
九州	6
中部	5
中国	2
四国	1
東北	1
北陸	1
沖縄県	0
北海道	0
記載なし	8
合計	47

表 10. 猫ひっかき病の検査法，治療，予後，病原体，感染機会

検査法	例数	治療	例数	病原体	例数
抗体検査	28	抗菌薬のみ	32	B. hensela	35
MRI, CT	26	抗菌薬+ステロイド*	5	特定不可	9
生検, 切除	12	抗癒薬剤	1	記載なし	3
眼底検査	9	ステロイド*のみ	1	合計	47
超音波	4	外科的処置	16		
PCR	2	無治療	6		
合計	81				

予後	例数
再発なし	10
軽快	35
視力低下	0
視野狭窄	0
再発	0
記載なし	2

感染機会	例数
ネコ飼育歴	23
ネコ接触歴	7
イヌ飼育歴	7
イヌ接触歴	1
和接触なし	2
記載なし	9

表 11. つつが虫病の年別論文数
及び症例数

年	論文数	症例数
2004	4	4
2005	6	9
2006	9	9
2007	7	9
合計	26	31

表 12. つつが虫病症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	0	0	0
5-9y	0	1	1
10-19y	3	0	3
20-29y	0	0	0
30-39y	0	1	1
40-49y	2	1	3
50-59y	3	6	9
60-69y	5	2	7
70-79y	4	2	6
80y-	1	0	1
合計	18	13	31

表 13. つつが虫病症例の主訴，主要症状，発生地

主訴	例数	主要症状	例数	発生地	例数
発熱	25	皮疹・紅斑	21	福島県	3
皮疹・紅斑	19	痂皮	15	長崎県	3
倦怠感	7	発熱	11	長野県	3
頭痛	5	リンパ節腫脹	8	埼玉県	2
咽頭痛	4	刺し口	6	岡山県	2
食欲不振	3	結膜充血	4	石川県	2
関節痛	3	喉頭蓋腫脹	2	静岡県	2
痂皮	2	全身倦怠感	1	鹿児島県	2
リンパ節腫脹	2	肝機能障害	1	三重県	1
嘔気	1	季肋部痛	1	山形県	1
呼吸困難	1	腎機能障害	1	山梨県	1
筋肉痛	1	意識障害	1	岩手県	1
めまい	1	項部硬直	1	広島県	1
ふらつき	1	扁桃腫脹	1	東京都	1
季肋部痛	1	黄疸	1	熊本県	1
合計	66	合計	68	群馬県	1
				青森県	1
				鳥取県	1
				北九州	1
				記載なし	1
				合計	31

表 14. つつが虫病症例における検査，合併症，感染機会

検査法	例数	合併症	例数	感染機会	例数
抗体検査	31	DIC	3	山菜取り	4
IgM,IgG 抗体	19	肺炎	3	山に用事	5
IF 法	5	ショック	1	自宅が山際	3
Peroxidase 法	3	胆嚢炎	1	草むらに入る	3
PCR	5	喉頭蓋炎	1	畑作業	1
Weil-Felix 反応	4	腎不全	1	植木	1
				農業	5
				酪農	1